

看護基礎教育におけるラベルワーク技法を 用いた看護研究計画書作成の取り組み

梶谷みゆき・石橋 照子・長島 玲子・高橋恵美子
林 健司・飯塚 桃子・井上 千晶・渡部 真紀

概 要

3年課程の看護基礎教育で3年前期に履修する「看護研究の基礎（演習）」において、看護研究計画書の作成をラベルワーク技法を用いて展開した。履修学生に質問紙による演習方法の評価を求め、16名から回答を得た。この演習方法全体に対して「演習の楽しさ」や「演習の満足感」の評価が高かった。細部においては、「研究課題の絞り込み」、「先行研究の整理」、「図考・図解による思考の整理」などの項目において高い評価を得た。初めて研究計画書作成に取り組む学生の演習方法として、この方法は有効な教育方法となる可能性を確認した。課題は、最初に具体的な事象を捉えて疑問ラベルを出す段階や文献検索ならびにその読み込みをする段階における学習支援を強化することである。

キーワード：ラベルワーク技法, 教育方法, 看護研究計画書, 看護基礎教育

1. はじめに

看護者にとって看護研究に取り組むことは、看護実践の中で抱いた疑問や問題を整理し解決を図る手段として、また科学的な根拠に基づいた看護を実践し看護の質を高めるために重要な活動である。

我々研究者は、臨床看護研究の指導や完成した研究論文の査読をする機会がしばしばある。その際、研究目的の絞り込みや、研究目的に整合した対象や方法の選択等において、現状の臨床看護研究には課題があると感じている。それらの研究活動における課題に接近し改善をはかるために、我々はラベルワーク技法を用いて看護研究計画書を作成する研修プログラムの検討を行ってきた（梶谷, 2006, 石橋, 2006）。

ラベルワークとは、人間の知的活動、とりわけ知の発信・交流および図解思考の道具として林が用い始めた概念である（林, 1994, 2002, 2004）

平成17年度のカリキュラム改正に際し、本学では統合領域に配置していた「卒業研究」を変

更した。それまで3年生で通年開講していた「卒業研究」2単位（60時間）を、「看護研究の基礎」とし2年生後期に講義を1単位（15時間）、3年生前期に演習を1単位（30時間）で展開することとした。看護者として看護研究を展開できる能力を修得する必要性を感じつつも、短期大学士教育課程ではカリキュラム展開における時間的制約があり、看護研究の教育に多くの時間を費やすことが現実的には困難であった。そのため旧カリキュラムでは「卒業研究」を履修する上で学生の負担が大きかった。

カリキュラム改正を機に、我々は限られた授業時間でも、看護研究の重要性を伝え、かつ初学者でもその進め方について理解しやすい教育方法を検討したいと考えた。そこで臨床看護研究を支援してきた実績を基に、ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成の演習を看護基礎教育で試みた。

本稿では、看護基礎教育における看護研究計画書作成の演習にラベルワーク技法を取り入れた具体的展開方法の報告ならびに今後の課題について明らかにする。

Ⅱ. 研究 方 法

1. 対象

平成19年度「看護研究の基礎（演習）」履修登録者（3年生）で、科目担当教員であり研究者である4名が演習を担当した32名のうち、研究協力依頼に同意をした者。

2. 方法

1) データ収集

研究協力依頼を記した無記名自記式質問紙（A3版1枚）を、演習終了前に配布し、演習終了後2週間以内に所定の回収箱への自主提出とした。

2) 調査内容

(1) ラベルワーク技法を用いた演習展開の効果について

①演習への参加度②演習の楽しさ③演習の満足感④疑問ラベルの共有⑤因子ラベルによる課題の絞り込み⑥文献ラベルの意義⑦先行研究の整理⑧図考・図解を通しての思考の整理⑨図考・図解による研究目的の設定⑩図考・図解による研究対象・方法の設定⑪研究計画書の作成方法の理解⑫研究計画の構想発表の意義⑬今後の研究計画立案への活用可能性の13項目を設定した。

①～③は演習そのものへの参加度や楽しさ・満足感などの演習活性化へのラベルワークの寄与を、④～⑬は研究計画立案手順に添った各段階における演習方法としてのラベルワークの適切性や効果を評価する項目として設定した。①～⑬は「ふつう：0点」を中心として「－3点：特に悪い」から「＋3点：特に良い」までの7段階評価とした。

(2) 自由記載

看護研究計画書作成をめざした演習企画とそれをラベルワークで展開した演習方法を通して自分が最も学んだこと、最も努力したことなどを自由記載で求めた。

3) 分析方法

得たデータを質問項目毎に、度数分布と百分率で比較する。自由記載への記載内容を質的に分析する。

3. 倫理的配慮

科目担当教員が履修学生を対象に調査をする

ため、研究協力への学生の自由意思が損なわれないよう、研究の趣旨、データ処理方法、公表について紙面で示し、研究者である各担当教員から十分な説明を行なった。質問紙は無記名自記式で、回収箱への自主提出による回収方法を取り、個人が特定されないようにした。研究協力への同意は、回収箱への自主提出をもって同意と判断した。

なお本研究の倫理的配慮については、島根県立看護短期大学研究倫理審査委員会（現島根県立大学短期大学部研究倫理審査委員会）の承認を得た。

Ⅲ. 演 習 の 実 際

1. 「看護研究の基礎（演習）」について

「看護研究の基礎（演習）」は、2年生後期に必修科目で履修した「看護研究の基礎」1単位（15時間）の基礎的な知識を基にして、看護研究の具体を発展的に学習する演習科目である。看護専門科目を担当する全教員11名が各自の研究領域を提示し、学生は自らの興味関心に合わせ希望票を提出して担当教員を決定する。教員は7～8名の学生を担当し、ゼミナール形式で演習を展開する。

2. 演習の展開

演習は毎水曜日2時限目に実施する。演習内容によって90分で演習展開が困難な場合は、時間や授業日を調整する。演習日程と演習内容について表1と表2に、ステップを踏みながら作成する図解のイメージを図1に示す。

なお、学生は看護学の講義・演習・実習でラベルワークを複数回経験している。

1) ステップ1：研究課題の陳述

看護実践の中で①繰り返し起こる状況②期待した成果が得られない場合③自らの看護行為を批判的に検証する場合などを取り上げ疑問を明確にする。看護学生の場合は看護実践の経験が限られているので、実習で遭遇した場面や文献からの疑問でもよい。メンバーの疑問を出し合って討議し、グループの疑問を精選する。その疑問に関して、関連している因子や背景因子をラベルを用いて洗い出し関連因子を類型化しながら、真の問題は何であり、看護研究となりうる

表1 「看護研究の基礎演習」プログラム

《目的》看護の学習から問題意識を動機として、研究目的に沿った文献検索を通して、研究目的あるいは仮説を明確にし、実証するための資料収集と分析の計画を立てることができる。	
《目標》	
<ul style="list-style-type: none"> ・ラベルワークの意義・技法が理解できる。 ・疑問から、研究課題に精選できる。 ・研究課題からキーワードを抽出できる。 ・研究課題に関する既知と未知を整理し、今回の研究目的を明らかにできる。 ・研究目的に合わせた研究対象と研究方法が検討できる。 ・図解を完成させ、研究の構想発表・意見交換ができる。 ・意見交換したことを踏まえ、図解から研究計画書を作成することができる。 	

《日程》

回数	月日	内容	図解	ラベル
1回	4月18日	ラベルワークの意義、演習の進め方OR 疑問探し		学び・感想ラベル
2回	月 日	疑問の選択		疑問ラベル 学び・感想ラベル
3回	月 日	問題の陳述		因子ラベル 学び・感想ラベル
4回	月 日	キーワード・類語の抽出	ステップ1 図解	学び・感想ラベル
5回	月 日	文献検索・収集		学び・感想ラベル
6回	月 日	知見の整理		文献ラベル 学び・感想ラベル
7回	月 日		ステップ2 図解	文献ラベル 学び・感想ラベル
8回	月 日	研究目的・方法の陳述		目的ラベル 学び・感想ラベル
9回	月 日		ステップ3 図解	学び・感想ラベル
10回	月 日	研究計画書案作成		学び・感想ラベル
11回	6月27日	発表・意見交換会（1）		学び・感想ラベル
12回	7月4日	発表・意見交換会（2）		学び・感想ラベル
13回	7月11日	研究計画書修正		学び・感想ラベル
14回	7月18日	学び・感想ラベルを使い学びの整理		学び・感想ラベル
15回	7月25日		学びのプロセス図解	

研究課題は何かを明確にする。

2)ステップ2：知見の整理

1)のステップの討議内容を踏まえてキーワードを選定し文献検索をする。検索によって得た先行研究を読み込み、要約としての文献ラベルを記述する。文献ラベルのラベル合わせならびに類型化して、その研究課題に関する既知と未知の知見の内容を整理し、研究課題を決定する。

3)ステップ3：研究目的、研究方法の陳述

2)で決定した研究課題に基づいて、これか

らやりたい研究の研究目的と、その目的に整合する研究方法を明確にする。

この段階で、図1のように図解は完成する。

4)ステップ4：研究計画書案作成

図解と各ステップで図解の中に示してきた説明文に基づいて、研究計画書（A3版1枚）を作成する。

5)ステップ5：研究計画書の発表、意見交換、研究計画書の修正

グループでまとめた図解と研究計画書を用い

表2 看護研究の基礎演習の進め方

	項 目	内 容	ラベル
ステップ1	疑問の陳述	看護実践の経験の中で、①繰り返し問題が起こる状況、②期待した成果が得られない場合、③自分の看護行為を批判的視点から検証した場合などに思い当たる疑問を考える。(例) ～が繰り返されるのは何故か。多くの患者が～するのは何故か。期待した効果が上がらないのは何故か。何故自分(看護師)はこう判断したのか(こう判断すればどうなるのか) など	疑問ラベル
	疑問の選択	文献を読んで、報告された研究結果に矛盾やギャップを感じた場合、研究結果の中で報告されていない部分で関心を持った場合などに矛盾や疑問を感じた点は何か、どんなことが気になったのか疑問点を明らかにする。	
	問題の陳述	提案者の発言を聞き同じように感じた経験があるか、強く興味か・関心を抱いたか等、自分に問かけ誰の疑問を精選してみるか話し合い決める。 疑問を精選した過程を説明文で書く。 選択した疑問について、どんな因子が関与しているか思いつく限りラベルに書き出す。 書き出したラベルをカテゴリー化し、関与する因子を整理し、問題はなんだと思うか話し合う。	因子ラベル
	キーワード・類語の抽出	研究課題を問題の形式で書き表す。(例) ～と～の間には関係があるのか。～と～では異なるのか。～について～はどのように認識しているのか。など その問題を解決するのに重要と思われる語を抽出し辞書等を使って定義を確認する。メンバー間で共通理解すると共に類語を抽出する。	
ステップ2	文献検索	抽出したキーワード、類語を用い文献検索をする。 タイトルや要旨などを読み、問題に関連あると思われる文献を選定し入手する。 入手した文献に番号を振り、メンバーで分担する。 文献を熟読した上で、文献ラベルを書く。	文献ラベル
	知見の整理	一人ずつ文献ラベルを読んだ上で、補足説明をしたり、質問に答えるなどして、メンバー間で文献を共有する。 似ている内容の文献ラベルを合わせ、同じ紙皿の上に置き、ラベル群の内容を表す看板をつける(図4)。 模造紙の上に、「問題の陳述」の上部に、文献ラベルを整理した「お皿」を配置する。 文献を概観し、陳述した問題に対して主にどのようなことが明らかにされているのか要約する。 図解を見ながら、研究課題に対して、どのあたりが明らかになっていて、どのあたりが明らかにされていないのか確認をする。	
ステップ3	研究目的・方法の陳述	陳述した問題について、未知の部分であることを確認し、平叙文形式(この研究の目的は、～と～の関係を調べることである。この研究の目的は、～について明らかにすることである。など) でラベルを記入する。 話し合い、1枚の目的ラベルを選択する。それについて以下の点について検討する。 ①明らかにしようとする問題の意義(看護研究になりうるか) はあるか。 ②効果(明らかにするとどんなメリットがあるか) はあるか。 ③研究可能性(正確に定義したり、測定が可能か) はあるか。 ④実行可能性(自己の能力に見合っているか、時間的に可能か、費用はどうか、倫理的に可能か、対象はいるか) はあるか。 ①～④について検討し確認できれば、検討したこととどんな対象でどんな方法で行うか、説明文として書く。検討した結果目的の陳述を変更した方がよいと判断できた場合は、新ラベルに記述する。 選択した研究目的・方法を一番上に書く。	目的ラベル
ステップ4	研究計画書作成	図解に記載してあることを元に、研究計画書案を作成する。具体的には以下の項目について記述する。 題目、研究メンバー、問題を陳述し、その問題の重要性を述べる。最終的に研究の目的を述べる。 関連文献についての簡潔に論考し、研究の独創的な点、意義について述べる。 具体的に対象、調査方法、分析方法、倫理的配慮について述べる。 予算を算出し記述する。 公表の予定を決め、作業計画を立て記述する。	
ステップ5	発表会・意見交換	研究計画書案を印刷し、発表会参加者に配布する。 各グループが図解を用いながら自分たちの疑問をどのように発展させ精選し研究目的に至ったのか発表する。迷っている点等あれば検討して欲しいこととして提案する。 参加者は、発表を聞き疑問点やよいと思った点について意見を述べたり、よりよい方法について提案する。また、発表者から提案された検討事項について意見を述べる。	
	研究計画書修正	発表会のコメントを受け、メンバーで話し合い修正をして研究計画書を完成させる。	
	学びの整理	研究計画書作成プロセスを通して学んだことを「学びのプロセス」としてまとめる。	毎時間の学び・感想ラベル

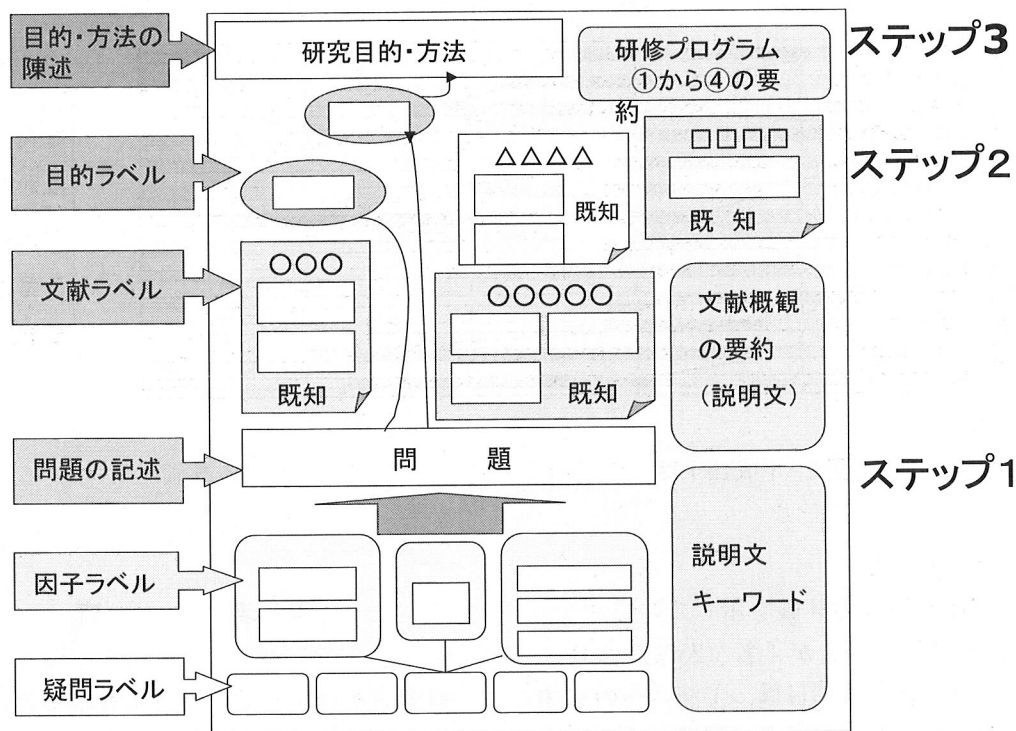


図1 ラベルワーク技法を用いた研究計画書図解イメージ

て、担当教員全員のグループで発表会を開催し意見交換をする。意見交換を踏まえて研究計画書を修正し、その整合性・妥当性を高める。

IV. 結 果

「看護研究の基礎（演習）」を履修し、研究者らが指導担当した学生32名中、質問紙調査に回答したのは16名（回収率50%）であった。

1. 演習の7段階評価

質問項目①～⑬の7段階評価を回答数の実数

で示したものを表3に示す。また各項目の回答の分布を百分率で示したものが図2である。項目⑩以外の12項目で「+1：良い」から「+3：特によい」の肯定的評価をした。演習全体としては②演習の楽しさ、③演習の満足感で肯定的評価をしたものが15名（93.8%）であった。

研究計画書作成の具体的な手順に添った質問項目である④～⑬で、15名（93.8%）が肯定的評価をした項目は、⑤因子ラベルによる課題の絞り込み⑦先行研究の整理⑧図考・図解を通しての思考の整理⑨図考・図解による研究目的の設

表3 平成19年度「看護研究の基礎」（演習）に関する評価

	特に良い	かなり良い	良い	普通	悪い	かなり悪い	特に悪い
	3	2	1	0	-1	-2	-3
①参加度	3	5	4	4	-	-	-
②演習の楽しさ	5	4	5	2	-	-	-
③演習の満足感	5	5	4	2	-	-	-
④疑問ラベルの共有	1	7	4	4	-	-	-
⑤因子ラベルによる課題の絞り込み	1	6	8	1	-	-	-
⑥文献ラベルの意義	4	6	4	2	-	-	-
⑦先行研究の整理	5	9	1	1	-	-	-
⑧図考・図解を通しての思考の整理	4	3	8	1	-	-	-
⑨図考・図解による研究目的の設定	2	6	7	1	-	-	-
⑩図考・図解による研究対象・方法の設定	2	4	6	4	-	-	-
⑪研究計画書の作成方法の理解	4	3	9	-	-	-	-
⑫研究計画の構想発表の意義	4	8	4	-	-	-	-
⑬今後の研究計画書立案への活用可能性	6	6	3	-	1	-	-

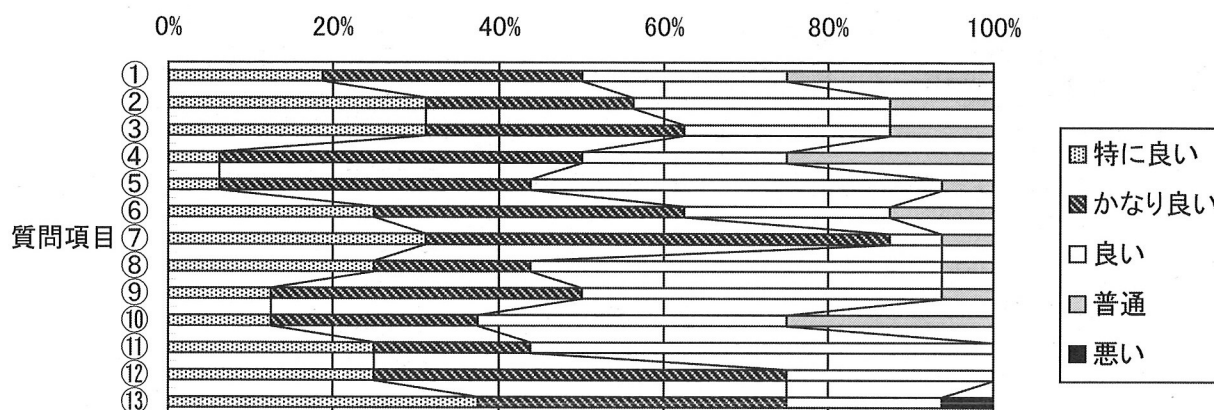


図2 平成19年度「看護研究の基礎」(演習)に関する評価

定の4項目であった。

一方、全体が肯定的評価を示している中で、「ふつう」と評価した者が4名(25%)おり、評価がやや低くなった項目は、①演習への参加度④疑問ラベルの共有⑩図考・図解による研究対象・方法の設定の3項目であった。また、項目⑬今後の研究計画立案への活用可能性は、全回答中唯一「悪い」と否定的評価をした学生が1名いた。

2. 自由記載の記述内容から

7段階評価の各質問項目に付随して記述されたコメント(表4)ならびに演習全体を振り返って記述された内容の要約(表5)を示す。総じて肯定的評価に付随する意見であった。我々が看護研究の理解として求めていた「順を追って進めていく必要性」「一貫性のある研究計画の必要性」「文献検索の重要性」などが記述されていた。また、ラベルワーク技法を用いた演習に対して「自ら積極的に意見を述べることの重要性」「メンバーとしての役割遂行」「演習の楽しさ」や「演習の達成感」「メンバーとの交流の深まり」等を述べていた。

反面、「研究計画立案における難しさ」「教員の細かな指導の必要性」「文献検索と読み込みにおける教員からの細かな指導の必要性」「納得できる演習展開のための時間の確保」など、今後に向けて改善を求める記述があった。

V. 考 察

研究者が行ってきた臨床看護研究の指導や研究論文の査読経験から、研究課題の絞り込みと研究目的の明確化、整合性を持った対象選択やデータ収集方法などに、現状の臨床看護研究の課題があると述べた。臨床経験が乏しく、看護基礎教育を受けている途上の学生が、看護の質を高める研究課題に辿り着き、現実に即した看護研究計画書を作成するには、かなりの学習と担当教員の学習支援が必要である。高い到達度を求められる演習課題に対して、学生が主体的かつ演習の成果を確認しながら進むことができる効果的な演習方法を検討した。

演習の各段階における履修学生からの評価は、全体として肯定的な評価であった。研究計画書を作成する思考過程は、ひとつの疑問から思考を線もしくは面に広げる拡大的な思考過程と、広がった思考を自らの疑問に問いかけながら現実感を持って集約する収斂的な思考過程の組合せである。このような動的な思考過程を、目標を見誤らずかつ論理的に整理していくことが可能な方法という点において、本演習方法は有効ではないかと考えている。ラベルワークは、ラベルによる発信や交流、ラベル図考や図解の作成を通して、思考過程を可視的に確認したり、グループメンバーで共有することが可能であるからである(林, 2004)。看護研究計画書を作成する演習を展開する上で、研究課題の絞り込

表4 13項目の設問に対する記述データ

項 目	記 述 意 見
①演習への参加度	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見をしっかりと言うことができた。 ・自分の考えを簡潔にまとめることで、他者との考えと自分の考えとの関係性がまとめやすかった。 ・役割分担で仕事のない人がいなかったので全員参加できました。 ・ラベルの使用によって参加状況が変わったとは思わない。 ・どんな意見が他にあるか聞いた。 ・毎回の反省や前回のことを振り返りながら出来たため良かった。
②演習の楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなとも仲良くなれて良かった。達成感があった。 ・実施する内容による。 ・みんなで話し合いながら図解の作成も行い、とても楽しく行うことが出来た。
③演習の満足感	<ul style="list-style-type: none"> ・大変だったけど充実したものだ。 ・研究はすごく時間がかかって苦労したけど、その分達成感を感じることができた。ラベル図解はとても良いものだったと思う。 ・前半はいまいち全体を把握しきれていなかった。 ・看護研究までの一連の流れを学ぶことが出来た。
④疑問ラベルの共有	<ul style="list-style-type: none"> ・文字で書いてあるので分かりやすかった。 ・グループメンバーがそれぞれ疑問に思っていることを知れた。 ・誰がどんなことに疑問を抱いているのか分かりやすかった。 ・ラベルを使わなくても共有はできると思う。 ・どんな疑問を持っているか明らかにできた。 ・どのような疑問があるのか文章で表すことで共通理解できた。
⑤因子ラベルによる課題の絞り込み	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが介入できる所がみえてきたので良かった。 ・関連性を考えるには良かった。 ・因子ラベルがあったため、課題の絞り込みをスムーズに行うことが出来た。
⑥文献ラベルの意義	<ul style="list-style-type: none"> ・意図を考えながらはやっていなかったけど、書いてみてその必要性を理解できた。 ・文献ラベルは文献の内容が分かっていると要約できないので、文献の理解をするためにも書いて良かったと思った。 ・文献ラベルを書き読むことで、研究の原本を全て読まなくてもそれがどんな研究かを理解できたとし、文献の整理もしやすかった。 ・自身の読んだ文献を他者へ伝えるためにとても有効であったと思った。 ・あまり分からない。 ・現在明らかになっていることと、そうでないことをしっかり区別することが出来、研究内容を絞ることができた。
⑦先行研究の整理	<ul style="list-style-type: none"> ・その文献で何がいえるのかまとめるのは大変だった。 ・自分たちがしようとしている研究がどれくらいされているのかを知り、研究の意義があるか知ることができた。 ・既知があったので、未知な部分を探ることができたと思う。 ・とても大切な段階であったと思う。
⑧図考・図解を通しての思考の整理	<ul style="list-style-type: none"> ・順をおって考えられるので良かった。 ・思考過程をたどることができた。 ・図解があると頭の中でも整理しやすく、話し合う上でも進行しやすかった。
⑨図考・図解による研究目的の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・整理して考えることができたのでやりやすかった。 ・図考・図解作成から研究目的は特に設定しやすかったとは思わない。 ・図解には、最初のステップ段階から示してあるため、目的を設定する上で過去の段階を振り返りながら設定することができた。
⑩図考・図解による研究対象・方法の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・方法は決めるのが難しかった。 ・あまり関係ない。 ・研究対象・方法にはあまり関与しなかったと考えられる。
⑪研究計画書の作成方法の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・難しくてすべて理解できたとはいえないかもしれない。 ・文献や先生方のコメントからある程度理解することができた。 ・ラベルワーク技法を用いたことにより、流れを追いながら研究計画書の作成を行うことが出来た。
⑫研究計画の構想発表の意義	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちだけでは気付かなかった所を指摘してもらえたので良かった。 ・他の研究の良い面を見ることが出来たし、自分たちにないものを得ることができた。自分たちの訂正すべき点など、他者の目で確認してもらい、より良い研究となったと思う。 ・他のグループの発表を聞いたり、先生方から意見をいただいたことで改善点が明らかになった。 ・他の先生たちの意見も聞けたので、参考になった。 ・他者の意見を聞くことで、自分達の研究の改善点を知ったり、さらに詳しく研究内容を作り上げるのに役に立ったため、とても効果的だった。
⑬今後の研究計画立案への活用可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で全部はなかなかできないかもしれないけど活かすことはできると思う。 ・もう少し改善が必要であると思う。 ・ラベルワーク技法は、研究者間で共通理解しながら進めていくことが出来るため、今後も活かすことが出来る。

表5 自由記載の内容

項 目	記 述 意 見
この演習もしくはラベルワーク技法を用いた展開方法を通して、あなた自身がもっとも学んだことは何ですか	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで一つのことを成し遂げることの楽しさ。難しくて大変だったけどみんなで協力しながら楽しくできたことはすごく良かった。 ・ラベルの限られた枠の中に、自分の考えを人に分かりやすく書くこと。 ・その日に学んだことを、振り返り文字にすることで、明確化し次の課題がみえる。 ・研究をするにあたって、どのように順をおって進めていけばよいかということを知ることができた。 ・グループメンバーでラベルに記入していくことで何が明確にしたいのかわかることができる。 ・研究を進めていくうえでは、言葉一つ一つに根拠を持つことが大切であること。 ・一人ではアイディアや考え方が単調になりやすいが、皆で話し合うことでラベルワークも充実し、他者の考え方を知ることが出来た。 ・一貫した流れで研究計画が立てられる。 ・研究とはどのようなものなのか、どのように進めていくのか、どのように記載するのかという研究そのものを知ることができた。 ・グループワークでみんなで情報を共有することは大切だと思った。 ・文献検索の重要性 ・ラベルワークや図解を用いることで、演習の流れを常に振り返りながら行うことが出来たため、焦点がずれることなく進めていくことができた。
この演習においてあなた自身が努力したことは何ですか	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見をもって、話し合いに積極的に参加した。 ・自分の役割をしっかりとこなすこと。 ・得意な部分（PCによる文献の検索など）では進んでやろうと思った。 ・お互いの意見を出し合いながら一番学びたいことは何か答え出せるように意見を言うようにしていた。 ・自分の役割をしっかりと果たすこと。自分の考えをしっかりと他のメンバーに伝えること。 ・皆も一生懸命話し合いに参加していたので、話し合いが円滑に進むよう積極的に意見を述べた。 ・研究の内容をきちんと理解する。 ・グループのメンバーと共に案を出し、文献検索をすること。図解作成においてわかりやすいように工夫をしたこと。 ・みんなと協力する。自分の意見をしっかりと言う。 ・何か協力する時は協力して行うようにした。 ・グループ学習だったため、積極的に発言することを努力した。
この演習方法をよりよくしていくための提案があれば記入して下さい	<ul style="list-style-type: none"> ・研究計画書は先生のアドバイスがなしには難しい。 ・文献検索にとっても時間がかかり、とてもやりにくく意欲も低下した内容であった。今回新しいカリキュラムだったからだと思うが、先生方の間でも研究の進め方、内容等において統一した演習方法をしていただきたい。 ・時間（質問等）が少なかった。 ・文献収集の時間をもっと増やしてほしい。（学外からの取り寄せも多数あるため）
その他この演習を通して感じたことや意見等があれば自由に記入して下さい	<ul style="list-style-type: none"> ・研究グループで協力してやっていったことで、研究計画書作成までスムーズに進んだと思う。休日でも学校に出てきて研究を進めたこともあり、達成感にもつながった。 ・看護研究の講義（2年後期）と演習（3年前期）の時間が離れていない方が良いと感じました。 ・構想発表会はとても良い機会だと思うので、今後も続けたら良いと思いました。 ・実際のところ、研究計画書までで終わるということはとてもありがたかった。夏の段階で終わることができ、学生の負担が軽減されるので助かった。興味のある教科について学ぶことができたので、より興味を深めることができた。 ・研究計画書は細かい所まで全部書き方が決められていて、大変だった。でも、一回でも演習していた方が今後の役に立つと思った。 ・構想発表会は、他の研究について聞く、又は逆に自分達の研究を発表することにより、良い点や改善点を理解しやすく、とても有意義な時間となった。

みと研究目的の明確化の良否は、その後の学習過程に大きな影響を与える。前述したように演習方法としての有効性を感じる一方で、この段階における教員の意図的な学習支援は欠かせない要素であり、学生が思考を発展的に整理できるように丁寧に指導する必要がある。

知見の整理のしやすさについては、文献ラベルに検索文献の要点を要約的に示すことが難しかったという意見があった。文献ラベルを記載する意義や文献を読み込むポイントを伝え、学生と共に文献を読み解くなど、既知と未知の知見の整理をする学習支援は、時間がかかっても丁寧に行なう必要がある。

演習の活性化という点では、「自分の意見を積極的に言うように心がけた」、「自分の得意分野を活用してグループに貢献するようにした」など、ラベルワーク技法を用いたことで、演習への参加度が高まったと言える。少数意見ではあるが、「ラベルを介することでグループワークへの参加度や情報の共有化が促進されたとは思わない」という意見があった。他の科目で何度かラベルワークを経験している学生ではあるが、看護研究計画書作成のステップが5段階あること、ステップ毎に求められる要素が多様であることなどから、学生にとっては演習の全体像や学習目標を捉えにくい状況があったと思われる。今後は演習の全体像やラベルワークで演習を進める意義が、履修学生に的確に伝わるようにオリエンテーションの内容や方法を改善したい。

VI. お わ り に

看護基礎教育における「看護研究の基礎（演習）」に、ラベルワーク技法を取り入れた試みの報告と教育方法に対する学生の評価から、その有効性と課題を検討した。看護研究計画書の作成は、学生にとって難しい演習課題であったと思われるが、ラベルワーク技法を取り入れたことで、思考の整理のしやすさや意見の共有しやすさなど、一定の評価を得ることができた。今後の課題として、具体的な事象を捉えて疑問ラベルを出す最初の段階や、文献検索と検索した文献を読み込む段階などを中心に、演習全過

程における教員の細かな指導ならびに学習支援の改善をはかっていきたい。

文 献

- 石橋照子，吾郷美奈恵，梶谷みゆき，武智佳子，高野美喜子，稲本夏江，松原峰子，川原仁美，三原記子，山崎祝代，野津早苗，児玉美由紀(2006)：ラベルワーク技法を用いた看護研究デザイン法，島根県立看護短期大学紀要，12，19-27
- 梶谷みゆき，長崎雅子，林義樹，石橋照子，加藤真紀(2006)：拡大図解を用いた看護研究計画立案支援プログラム，看護展望，31(6)，93-99
- 林義樹(1994)：学生参画授業論—人間らしい「学びの場作り」の理論と方法—，学文社，東京
- 林義樹(2002)：参画教育と参画理論—人間らしい『まなび』と『くらし』の探求，学文社，東京
- 林義樹，金城祥教(2004)：看護の知を紡ぐラベルワーク技法—参画型看護教育の理論と実践—，精神看護出版，東京

An Endeavor toward Making Nursing Research Design by Using Label Work Technique in Nursing Fundamentals

Miyuki KAJITANI, Teruko ISHIBASHI, Reiko NAGASHIMA,
Emiko TAKAHASHI, Kenji HAYASHI, Momoko IITSUKA,
Chiaki INOUE and Maki WATANABE

Key Words and Phrases: label work, educational method, nursing research design,
nursing fundamentals